

第3回

「職業奉仕における個人と職業の倫理」

深川 純一 P G (伊丹 R C)

2009年3月23日

於 ハイアットリージェンシー東京

『職業奉仕における個人と職業の倫理』

RI2580 地区職業奉仕セミナー 2009. 3. 23

深川 純一 P G

(伊丹 P R C)

今日は、「職業奉仕における個人と職業の倫理」というテーマを頂いてます。先ず、このテーマの問いかけている趣旨については、色々な解釈があるかと思いますが、私は、端的にロータリアン個人の職業倫理を問いかけているものと率直に解釈して話を進めたいと思います。

実は、職業倫理の問題は、ロータリー職業奉仕の中核にある問題であり、これなくしてロータリーの職業奉仕は語れないのであります。したがって、これはロータリーの思想に関わる問題でありますので、職業倫理を論ずるときには、先ずロータリーの歴史の原点から考察しなければならないと思うのであります。

先ず、若干のイントロダクション的な話から入っていきたいと思います。

ロータリーに限らず、凡そ運動体というものは、その運動に起動力を与える時期が最も大切なのであります。ロータリーはその時期に哲学的思考を持ったポール・ハリスをはじめ素晴らしい指導者達が居たことは幸せでありました。彼らは、高々と理想を掲げ、その理想に燃えて行動しました。そのために正に熱く燃えた素晴らしいロータリーが現れたのであります。そこで、先ず、その発展の軌跡を簡単に振り返ってみたいと思うのであります。

先ず、1905年、ロータリーは、「一業一会員制」と「規則的例会出席」というロータリーの基本原則を確立しました。そして、その10年後の1915年にはサンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」別名「ロータリー道徳律」を採択してロータリアンの個人倫理を確立致しました。これは、今日のテーマと重要な関係があります。

更に、その7年後の1922年、ロサンゼルス国際大会において「国際ロータリー定款・細則及び標準ロータリークラブ定款」を採択してロータリーの組織原理を確立しています。

そして、その翌年の1923年、セントルイスの国際大会において「決議23-34号」を採択してロータリーの実践原理を確立しました。

更に、その4年後の1927年、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕という四大奉仕部門を確立して原理探求のロータリーから実践のロータリーへ邁進していったのであります。

これを要約致しますと、ロータリーの基本原理の確立に始まって、個人倫理の確立、組織原理の確立、実践原理の確立そして4大奉仕部門の確立。これら

は全てロータリー創立後25年間、即ち、4分の1世紀の間に実現された素晴らしい魅力に満ちたロータリーでありました。

ところが、今はどうでしょうか。ここ僅か百年のロータリーの歴史を顧みても、ロータリーは衰退の一途を辿っているのです。あの二十世紀初頭の高々と理想を掲げ、それに燃えて行動した素晴らしいロータリー。そして様々な原理を確立したロータリー、その原理を実践したあの熱く燃えたロータリーは、一体何処へ行ってしまったのでしょうか。今、影も形もありません。

先程、冒頭に申し述べました要約のうち、今日のテーマに直接関係のある部分について少し詳しく申し述べておきたいと思えます。

先ず、一つの職種から一人だけ会員を選ぶという「一業一会員制の原則」所謂「職業分類の原則」は、クラブ親睦を守るために、ロータリーの創立者ポール・ハリス自らが1905年2月23日に打ち立てた大原則であります。しかし、この原則は、2001年、規定審議会の決議によって廃止されました。

一業一会員制の原則が廃止されたとき、ロータリーをこよなく愛した素晴らしいロータリアン達が、ロータリーに幻滅の悲哀を感じ、ロータリーに愛想をつかして、ロータリーを去って行ったことは未だ記憶に新しいところであります。

また、ロータリアンが規則的に例会に出席するという原則は、1905年3月23日のシカゴロータリークラブの創立総会において決められた原則であり、その内容は、4回連続して欠席したるものは自動的に会員資格を失うというものであります。この原則もクラブの親睦を守る規定であり、しかもこれは一業一会員制の原則と共にロータリー職業奉仕の基本前提になっている原則なのであります。

しかし、この原則も1968年以降、規定審議会の決議による度重なる規制緩和によって有名無実になってしまいました。

また、ロータリアンの個人倫理の核であった1915年の「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」別名「ロータリー道徳律」は、1980年の規定審議会で廃止され、更に昨今、1923年の個人奉仕を中核とする実践原理の核「決議23-34号」は、今後は手続要覧に歴史的文書として保存されることになり、そして今、1922年の組織原理の核にある「クラブ自治権」は、RIによるCLPの提唱によって揺らいでいます。

これが今のロータリーの状況であります。このようにロータリーは、20世紀初頭に形成された素晴らしい原理・原則の殆どを失ってしまったと謂えるのであります。まさに「ロータリーよ、何処へ行く」という感じであります。昔、バーナードショウが謂った言葉であります。

また、或るパストガバナーが謂いました。“Rotary rest in Peace”平和の中

に横たわるロータリー即ち、死せるロータリー、と。

このように致しまして、ロータリーは、今、衰退の一途を辿っていると思うのであります。

では、このロータリーに起死回生の策はあるのか。

それには、冒頭に申し述べましたように、20世紀初頭のあの熱く燃えた原理探求のロータリーに還らなければなりません。殊に昨今、ロータリーは、職業人の集まりであるにも拘わらず職業の倫理が頹廃しています。したがって、先ず緊急の課題は、職業奉仕の中核にある職業倫理を高めなければなりません。

では、そのためには一体何が必要なのか。

それは、先程申し上げましたロータリーの組織原理の根幹となっていた「一業一会員制の原則」と「規則的例会出席の原則」の存在意義を再確認することです。

それは一体何故なのか。先程申し上げました通り、2001年度の規定審議会においてこの一業一会員制が廃止され、一業多会員制に移行しましたが(01-148号議案)その結果、どうということになるのかと申しますと、ポール・ハリスが最も大切だと考えていた「クラブの親睦」が失われてしまうのであります。親睦というものは何億円にも換えがたいもの、金銭では買いきれないほど大切なものなのであります。

それは一体何故か。一業多会員制ではクラブの中に同業者が沢山入って来ます。すると、当初ポール・ハリスが掲げたロータリーの原点、同業者を排除してクラブの親睦を守ろうという理想が失われてしまうからであります。

では、同業者がいると何故クラブ親睦が崩れるのか。

私達の今生きている資本制経済社会は、自由競争社会でありますから、会員は同業者との関係では、正に食うか食われるかの関係に立たされます。したがって、同業者は競争相手がいるが故に、ある種の危機感を持ちます。したがって、自分が潰れる前に彼奴が潰れてほしいという訳の判らない感情の虜にもなります。

また、同業者は同じ業界にいますから、お互いに善いところは知って居ます。しかし、悪いところも、醜いところも汚いところもお互いに知り尽くしています。したがって、彼奴は俺の欠点を知っているなという意識がありますから、お互いに心を開いて付き合うことができません。

このように致しまして、クラブの中に同業者がいるとお互いに仲良くなれない、クラブの親睦が保てないのであります。だからこそポール・ハリスは、1

1905年2月23日の4人で集まった最初の会合に於いて、同業者を排除して、一つの職種から一人だけ会員を採ることにしようといったのであります。これが謂わばロータリークラブという組織の原点でありました。

このように致しまして、一業一会員制の原則は、クラブの親睦を保つための大切な原則でありました。ところが、この一業一会員制の原則の廃止は、事もあるうに国際ロータリー理事会の提案でありましたが、ロータリーの原理からみて、果たして如何なものかと思うのであります。

一つ極端な例を挙げますと、私は約10年位前、800人以上の会員を擁するアメリカのヒューストン・ロータリークラブの職業分類表を手に入れましたが、それによりますと、驚いたことに一つの職種、弁護士という職業分類に50名の弁護士が登録されて居たのであります。公認会計士の職種には20名を超えて登録されておりました。ポール・ハリスが打ち立てた一業一会員制の大原則は、全く無視されていたのであります。2001年度の規定審議会によるこの原則廃止の決定も、国際ロータリーの理事会がこのようなアメリカにおける現象に押し流されたのではないかとも思われるのであります。このような状態では、あの20世紀初頭の原理探求の素晴らしいロータリーは取り戻すべくもありません。

また、一業一会員制と同じく「規則的例会出席の原則」も親睦を守るための原則でありました。これは、「会員資格」に関する非常に重要な原則でありまして、4回連続して欠席したるものは、自動的に会員資格を失うというものであります。この原則は、ロータリークラブの創立総会の場で、既に原則化されていたわけでありまして。

ただ、この原則は、法律的に見ると、あまり出来がよくないのであります。何故ならば、誰でも病気をすれば4回欠席することもあり、また、どうしても抜けられない用事のために4回連続欠席することもあります。それにも拘わらず、理由の如何を問わず、4回連続欠席という欠席回数のみによって会員資格を奪うというのは、社交クラブのようなファジーな団体の組織管理としては、窮屈に過ぎるからであります。したがって、法律家であれば、このような場合は、但書きを付けます。『但し、正当な理由のある時は、この限りにあらず』と。

では、シカゴクラブには法律家が居なかったのか、と謂うと、ポール・ハリスが居ました。彼は、後に American delegate として国際会議にも出席している大弁護士であります。では、彼が居たのに何故、このような窮屈な規定を作ったのか。

それは、当時は2週間に1回の例会でありましたから、お互いに仲良く助け合って行こうと誓い合っておきながら、4回も連続して欠席するという事は、2ヶ月もお互いの安否も気遣わないことになる。そんな冷たいやつは俺たちの

仲間ではない、辞めて貰おうと言うのが彼等の心であったのであります。それほど彼らはクラブ例会とその親睦ということを大切に考えていたわけでありませぬ。

このように致しまして、ロータリーは、親睦のエネルギーをもって世のため人のために動いていこうというものであります。「親睦なくし奉仕なし」。これはロータリーの根底に流れる思想なのであります。

したがって、21世紀のロータリーの未来の展望を切り開く鍵は、先ず一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則を回復することであろうかと思うのであります。

そこで、1905年から1927年に至る22年間の初期ロータリーの原理形成の軌跡を顧みて学び得るものは一体何か。その一つは、職業奉仕と謂う概念がロータリーの原理形成の最後の1927年に現れているという事実であります。それ以前は、職業奉仕という言葉はなかったのであります。

しかし、職業奉仕という言葉が現れたのは確かに1927年ではあります、職業奉仕という原理が生まれる芽生え、即ちその原因は、既にロータリーが始まった1905年の「一業一会員制」と「規則的例会出席」の原則の中に見いだすことが出来るのであります。

実は、この二つの基本原則は、職業奉仕の実践、更により根源的には職業奉仕の中核にある職業倫理の実践の基本前提なのであります。したがって、「職業倫理」を語るには、先ず、この二つの基本原則から検証しなければなりません。

今、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則が職業倫理実践の基本前提であると申しました。

それは具体的には一体どういう意味なのか。

先ず、1905年、創世記のロータリーには、世のため人のための奉仕などという考え方は影も形もなかったのであります。そこには、クラブ会員が皆で仲良くして助け合う「親睦だけの世界」がありました。

この助け合うということの具体的な意味は何か、と申しますと、ロータリアンは、皆職業人でありますから、自分の企業経営上の悩みをクラブに持ち寄って智慧を出し合ったのであります。「うちの会社では今こういうことで悩んでいるんだ。何かいい考えはないかな」と言いますと、当時は一業一会員制でありますから会員は皆それぞれの所属する業界が違います。したがって、それぞれの業界の発想も違います。

そこで、「そのことならうちの業界ではもう解決済みだ。こうして御覧」と言って教えてくれます。「有り難う」といって早速そのアイディア（ノウハウ）を企業経営に役立てます。

また、或る問題については、皆未だ未解決であった場合には、三人寄れば文珠の知恵と謂いますから、皆で衆知を集めて解決して行ったのであります。

このようにして皆が知恵を出し合い、アイデアを交換して助け合ったのであります。したがって、当時は、恰も、クラブが経営相談所のような機能を果たすようになり、会員達はこの助け合い運動によって次第に豊かになって行ったのであります。

そして更に、自分達が豊かになるためには、自分のことだけを考えるのではなく、人のことも考えなければならないことに気付き、更に、地域社会の人達も豊かになるにはどうすればよいかを考えるようになりました。そして、そこから「世のため人のための奉仕の考え方」、即ち、倫理の問題を考えるようになったのであります。

このように致しまして、企業経営上の発想の交換及び世のため人のための奉仕のアイデアの交換などの「発想の交換機能」Exchange of Idea の機能によって、やがてロータリーは、1927年、職業奉仕という類い希なる概念を生み出すに至ったのであります。

このクラブ例会における「アイデアの交換機能」「発想の交換機能」こそ、ロータリークラブが創立当初からもっていた「本質的な機能」でありまして、このことは当時のクラブの定款にも「発想の交換」Exchange of Idea という言葉が記されていたのであります。

ところが、何時しか、この発想の交換という言葉が定款から消えてしまったのであります。それは一体何故か。

クラブ例会における「発想の交換」Exchange of Idea と謂うことは、ロータリークラブにあっては至極当然のことではないか、当たり前のことであれば、わざわざ書いておく必要はないだろう、と謂うので、消してしまったのであります。

したがって、言葉は無くなりましたが、現在も「発想の交換」Exchange of Idea という機能は、ロータリークラブの「本質的な要素」として厳然として存在するのであります。

我が国でも、昔、私が入会した頃のロータリークラブには、未だこの発想交換機能が残っていました。私は、弁護士のほかに学校の理事長をしています。当時、労働運動華やかなりし頃でありましたから、団交のノウハウを実業家の先輩によく教えられたものであります。

しかし、今のクラブにはこのような情景は全く見当たりません。したがって、この発想の交換による例会出席の重要性を、今日の日本のロータリアンはどれほど認識しているのでしょうか。答えは著しくネガティブであります。

多くのロータリアンが、例会では、食事をとり、報告を聞き、卓話を聞いて

帰って行きます。ただ、それだけであります。中には卓話も聞かずに食事だけして帰って行く人達も沢山居ます。例会における企業経営上の知恵の交換・発想の交換 (Exchange of idea) は全くありません。ロータリアンに自己研鑽・切磋琢磨の意識すらないようであります。このような状態では、職業奉仕は中々理解出来なからうと思うのであります。

翻って、20世紀初頭のロータリアン達はどうか。先程申し述べましたように、例会の重要性を強く認識して、自己研鑽・切磋琢磨による企業経営上のアイディアの交換や奉仕の発想の交換をしていたのであります。

そして、その発想の交換という例会活動の中からロータリーの企業管理論でもいべき原理を開発し、その原理を実践して、1927年、遂にその実践原理を職業奉仕と名付けたのであります。そして、その中核にあるのが職業倫理なのであります。

このように致しまして、その2年後の1929年、アメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニックの時にロータリアンは一人も倒産しなかったのであります。これは、クラブ例会における発想の交換によって職業奉仕の原理を開発して自らの企業に実践し、職業奉仕の中核にある職業倫理を実践していった功德だと言われているのであります。だからこそ、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則が職業奉仕、したがってまた、職業倫理実践の基本前提なのであり、職業奉仕の実践は、先ず例会出席から始まるのであります。

今、1929年の経済パニックにおいてロータリアンは一人も倒産しなかったと言いましたが、一般的に言って、ロータリアンは、発想の交換によって企業経営上のノウハウを開発し、それを企業経営に適用するという職業奉仕の実践によって自由競争の勝者になることができます。ただし、ロータリアンだけが倒産せずに勝者になって生き残ればよいというわけではありません。

ロータリアンは、勝者になった後で、または勝者になる過程において、自由競争に破れて行った敗者の代弁者となって、企業経営上のノウハウを提供したり、職業倫理を提唱したりして、世のため人のために力を尽くさなければならぬのであります。これがロータリーの職業奉仕の実践であります。

殊に、ロータリーは倫理運動の視点に立って、同業者関係や下請関係においても、常に倫理を提唱し、共存共栄の道を模索すべきことを説くのであります。

これは、職業奉仕の大きな柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。この故に、『ロータリーは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』と謂われているのであります。したがって、この考え方が正にロータリーの核にある考え方なのであります。

実は、この「ロータリーの核」にある考え方を文章として明確に表現しているものが標準クラブ定款第4条の「ロータリーの綱領」なのであります。

したがって、”綱領を知らずしてロータリーを語ることなかれ”と言われてるように、綱領を身につけることはロータリアンであることの絶対条件なのであります。綱領を知らなければ、それはロータリークラブの会員ではあってもロータリアンとは謂えないのであります。

このように、ロータリーの綱領は、ロータリーの般若心経ともいうべきものでありますから、ロータリアンとしては、大悟徹底的に理解していなければならない問題なのであります。ところが、最近、綱領を知らないロータリアンが増えてきたということを耳にします。これは誠に由々しきことであります。ロータリーが衰退し、したがって、職業奉仕が衰退するのは至極当然のことです。昔は、このようなことは絶対にあり得なかったのであります。クラブとしては、新会員を迎え入れる時には徹底的にロータリアンを教育すべきであります。

さて、冒頭に申し上げましたとおり、ロータリーがロータリアンの個人倫理を確立したのは、1915年サンフランシスコ国際大会の決議であります。ということは、クラブレベルではそれ以前から個人倫理の提唱は始まっていたのであります。

では何故、ロータリーは「職業の倫理」を提唱し出したのでしょうか。

この点については、非常に重要なところであるにも拘わらず、今まで殆ど情報が提供されていませので、少し詳しくお話し申し上げます。

実は、職業倫理の提唱については、既にロータリークラブの創立された翌年、1906年春のドナルド・カーターの物語にまで遡ることになります。

Donald Carter という人の職業分類は、アメリカ流に言えば特許専門の弁護士、日本流に言えば弁理士であります。

1906年4月、シカゴクラブの二代目会長 Albert White の時、Frederic Tweed が Donald Carter にクラブへの入会を勧誘した。Donald Carter は、クラブの「互惠主義」即ち、助け合い運動の説明を聞いて、

『君達は、お互いに助け合って、豊かになって楽しいだろう。しかし、一業一会員制の原則であれば、クラブに入れない同業者は一体どうなるのか。また、職業人の集まりであれば、職業を持たない一般地域社会の人達は一体どうなるのか。』

私達は、この地域社会に生まれ、地域社会に育てられ、地域社会にお世話になって暮らしている。このお世話になった地域社会に何らの恩返しもしない。何らの足跡も残さないで、自分達だけが助け合って、隆々と栄えて、やがてこの世を去っていく。そのようなエゴイズムの団体は永続性がないだろう。

私は、二度とない人生を、そのようなエゴイズムの世界におくことは出来ない』と言ってきっぱりと入会を断ったのであります。

これを聞いて、痛く反省したのがポール・ハリスでありました。

『Carter の言うとおりで。クラブの行き方を変えよう』と言って、職業人の親睦のエネルギーを世のため人のために使おうと考えるに至ったのであります。

実は、この Donald Carter の刺激から出てくるポール・ハリスの反省から、ロータリーにおける奉仕という考え方が生まれたのであり、これが、ロータリーにおける「倫理性の萌芽」(芽生え)でもありました。

と同時に、それは、ロータリー拡大の系譜の始まり(萌芽)でもあったのであります。何故なら、ロータリークラブが単に親睦だけでなく、世のため人のためのクラブであれば全米の諸都市に在って然るべきだという考え方からロータリー拡大の理念が出て来たのでありますから、自分達のことしか考えない親睦だけのクラブからは、ロータリー拡大の理念は出て来ないのであります。

要するに、1906年以前にはロータリーに、世のため人のためという考え方即ち、奉仕とか職業倫理という考え方は全くなかったのであります。したがって、ロータリー拡大の理念もなかったのであります。

ただ、職業人の淋しさ、心の渇きを癒すためにロータリークラブを作ったに過ぎなかったのであります。それは正に親睦と相互扶助の世界でありました。

このことに就きましては、後年、昭和10年にフィリピンのマニラにおいて第3回太平洋 Regional Conference が開催されましたが、それに出席するために、途中で日本に立ち寄ったポール・ハリスが、

『自分が1905年にロータリークラブを作ったのは、格別の意味があったのではなくて、ただ、淋しかったからだ』

と謂っていることにより裏付けられるのであります。

例え話をします。「蓄」という字は、草冠りに雷と書きます。即ち、大自然の雷のエネルギーが花を咲かせるのであります。雷は地上に花を咲かせる空からの使者であります。これと同じように、Donald Carter の警告による刺激が、まさに雷のように、それまで親睦だけの世界に閉じこもっていたロータリーに世のため人のための奉仕の花を咲かせたのであります。

要するに、1906年以前にはロータリーに奉仕という考え方はありませんでした。世のため人のためにという考え方は全く存在しなかったのであります。

ただ、職業人の淋しさ、心の渇きを癒すためにロータリークラブを作ったに過ぎなかったのであります。それはまさに親睦と相互扶助だけの世界でありました。

ところが、1906年春に至って、Donald Carter の外部的な刺激により、ロータリーの世界に『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』という奉

仕の考え方が出てきたわけでありまして、これは、それまでのロータリーからすると全く異質の要素でありました。

しかし、このことが実はロータリー発展の起爆剤的機能を果たすこととなります。即ち、クラブ例会で企業経営上のアイデアを交換することによって、企業経営上のノウハウを開発し、それを交換するようになりましたが、それと共に、1908年には世のため人のための奉仕のアイデアも交換するようになったのであります。つまり、親睦だけの単なる仲良しクラブではなく、世のため人のために役立つ人を育てようとする所謂倫理的な色彩が出てきたのであります。

そこで、企業経営について、職業人として為すべきこと、為すべからざることをお互いに誓い合うという所謂職業倫理の提唱をするようになり、この精神的な機能が先程の経営相談所的機能と相俟って、会員達の企業は益々栄えていったのであります。

要するに、当初、親睦だけの集まりであったロータリークラブに世のため人のための奉仕の考え方が入って来て、企業経営が世のため人のためという倫理性を帯びるようになったのであります。

このようにして、ロータリーは、1910年以降、世のため人のための企業経営、倫理的な企業経営を提唱し実践するようになりました。まさに、ロータリー運動が倫理運動になったのであります。

そして、このクラブレベルにおけるロータリアンの個人倫理の集大成として、1915年のサンフランシスコの国際大会におきまして『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』（所謂『ロータリー道徳律』）11ヶ条を採択するに至ったのであります。

これがロータリーにおける職業倫理の確立の問題であり、それ以後、ロータリーは、その運動の核として誠に高潔な職業倫理を提唱してきたのであります。

その後、日本においてこの職業倫理の提唱を受け継いだのは、1928年即ち、昭和3年創立の満州の大連ロータリークラブの古澤丈作さんでありました。

彼は、ロータリーに入会するや否や、いち早くロータリー思想の源流を探求致しましてこの1915年の『ロータリー道徳律』を発見しました。そして、これを日夜お経の如く熟読玩味して完全に自家薬籠中のものとなし、これを5ヶ条の日本語に書き改めたのであります。

これが1928年即ち、昭和3年の『大連ロータリークラブのロータリー宣言』という職業倫理宣言であります。

そして、この『大連クラブのロータリー宣言』が戦前の日本のロータリアンの職業倫理のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。

戦後の日本のロータリーでは、東京浅草ロータリークラブの『玩具職業人倫理宣言』があり、最近では、1983年、私の所属しております兵庫の第2680地区が地区大会特別決議として採択した「ロータリー職業訓」という倫理宣言があります。最も近いところでは1995年6月28日仙台青葉ロータリークラブの『職業倫理宣言』があります。これらは、いずれも職業奉仕の原理に基づいた素晴らしい提唱であります。クラブが倫理宣言をした例は非常に少ない、否、殆どないと謂ってよいかと思っております。

ところで、職業倫理を中核とする職業奉仕という言葉を考えてみますと、実は、これは大変奇妙な言葉、奇妙奇天烈な言葉であります。それは一体何故か。

元来、職業というものは、私達が生きて行くための所得を得るための手段、即ち、金儲けの手段でありますから、これは自分のためのものであります。

ところが一方、奉仕というものは、世のため人のために何かをすること、即ち、自分以外の人のためのものであります。

このようにエネルギーの方向が全く正反対の二つの言葉を一つにドッキングさせて職業奉仕と言っているのでありますから、判りにくいのも無理はないのかも知れません。

一体、自分のためのものである職業が、人のためのものである奉仕のテーマになり得るのでありましょうか？

職業を営むこと、即ち、金を儲けることが、何故、世のため人のための奉仕となるのか？職業即ち金儲け、これを奉仕と考えるためには、一体いかなる考え方が必要なのか？

この一点が判らないと、職業奉仕は、永久に判らないことになるのであります。これを論証していくのが、まさに今日の課題であろうかと思っております。

まず、世のため人のための『奉仕』についての最も素朴な考え方から検討してみますと、職業は、所得獲得の手段、即ち、金儲けの手段であります。それは、あくまでも自分のためのものであって、そこには、世のため人のためという他人のための考え方は一切入る余地はありません。したがって、職業は奉仕になりません。職業と奉仕とは、それぞれ別の世界に存在すると考えることとなります。

この考え方からすれば、職業を営むことが同時に奉仕になるとは考えられないのでありますから、世のため人のために『奉仕』をしようとするれば、職業以外の方法によらざるを得ません。

例えば、職業によって得た所得の一部を恵まれない人達に与えるとか、自分の労力や時間の一部を割いてボランティア活動をするとかして、いわば弱者

保護をもって奉仕と考えるわけでありませぬ。したがって、職業をもって、即ち、金儲けをもって奉仕と考えることはできないのでありませぬ。

勿論、弱者保護については、ロータリーも社会奉仕の範疇においてこれを重視し実践しているのではありませぬが、この素朴な考え方では、職業という視点から奉仕ということを考えることが出来ないのでありませぬ。

要するに、所得を得るために行動する時の心、即ち金儲けの心と、世のため人のために奉仕する時の心とは、全く次元を異にしているわけでありませぬ。

実は、ロータリークラブ以外のアメリカ系奉仕クラブは、殆ど全てこの考え方でありませぬ。ライオンズクラブ然り。キワニスクラブ、シビタン、コスモポリタン、皆然りでありませぬ。

ところが、ロータリーだけは違っているのでありませぬ。ロータリーは、職業を営む心も奉仕の心も共に同じ一つの心、つまり、金を儲けるために考えるエネルギーと世のため人のために考えるエネルギーとは、その向かっている方向は異なるが、その行動を起こす元になる心は、一つの心だと考えるのでありませぬ。即ち、一つの心をもって、職業を営み且つ奉仕すると説くのでありませぬ。金を儲けることが同時に世のため人のための奉仕になる、と考えるのでありませぬ。

言い換えますと、ロータリーは、世のため人のために奉仕する心をもって職業を営むべし、と説くのでありませぬ。したがって、この考え方では、必然的に職業を営むことに即ち、金を儲けることに世のため人のためという倫理性を要求することにならざるを得ないのでありませぬ。即ち、倫理的な金儲けをすと謂うことでありませぬ。

さて、そこで私達は、倫理の問題を考えると、人間の行動パターンを考えてみる必要があります。それは、『打算の世界』と『愛情の世界』に大別出来ませぬ。

(1) 『打算の世界』とは、人間が価値を求めて行動する分野でありませぬ。人間は、本来、価値のないものは相手に致しませぬ。例えば、1万円の商品と1万円の貨幣とが交換されるのは、その交換によって売主・買主双方にそれぞれ何らかの利益があると考える時に、この等価交換は成立するのであって、一方が交換によるメリットがないと判断した場合には、この等価交換は成立致しませぬ。

このように、打算の世界とは、人間が等価交換の原則の下に常に何らかの価値を求めて打算によって行動する分野のことでありませぬ。

(2) 「愛情の世界」とは、貨幣価値等では計ることの出来ないほど価値のある世界、そこには、打算や等価交換の原則などは一切存在しない、そういうものを一切必要としない世界、例えば、夫婦の関係のように、私の物は貴方の物よ、貴方の物は私の物よ、という考え方の支配する世界でありませぬ。

そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。この価値は、計り知れないものと言わなければなりません。

ところで、打算の世界では、等価交換が終了するまでは、人と人とは関係づけられていますが、一旦、交換が終了すると、その人間関係は貸し借りなしに精算されてしまいます。例えば、1万円の商品と1万円の貨幣が交換されることによって取引は終了し、売主・買主の間は、一切貸し借りなしに精算されて、後には何も残りません。

ところが、愛情の世界では、例えば、ご主人が今月の手形の決済が出来なくて困っている時に、奥様が実家から貰ってきた500万円を提供し、例えそれが返して貰えないことになったとしても、それを裁判にかけてまで請求することは絶対にありません。その限りにおいて、精算されないままに因縁が残っています。打算の世界から見れば、まさに奥様が損をしたことになるのですが、それを損とは考えない、即ち、打算的思考の圏外にある思考であります。そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。

実は、職業奉仕というのは、この愛情の世界の考え方をもち、打算の世界をコントロールして行こうという考え方、即ち愛情をもって職業をコントロールして行こうという考え方です。これが「職業奉仕の根本原理」であります。

愛情の世界は、先に述べたように、人間関係が精算されないで、常に人と人とは或るものによって因縁づけられている世界、色々な出会いがいつまでも尊重されて行く世界であります。そのような関係の中から尊敬と信頼が生まれて来るのであります。

そして、実業家の場合には、更に信用が生まれるのであります。尊敬と信頼そして「信用」があるからこそ実業家は、長期的に安定した経営をすることができるのであり、個々の取引が常に貸し借りなしに精算されていく打算の世界からは、尊敬も信頼も信用も生まれないのであります。世の中の成功した実業家は、必ず、愛情の世界の原理をもって自分の企業をマネージしているのであります。

先程の1万円の商品の売買の例で言えば、売主と買主の間に商品と貨幣の交換（目に見える世界）と同時に、感謝と満足の交換（目に見えない世界）がなければならない、とロータリーは説くのであります。

要するに、ロータリーは、倫理運動の立場から、愛情の世界に生きる心、即ち世のため人のための心をもって職業を営んでいると、その結果として、『信用』という保護膜に包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得する強靱な体質の企業を作り上げることができると説くのであり、その「原理の総体を職業奉仕」と呼んでいるのであり、その中核にあるのが「職業倫理」であります。

さてそこで、職業奉仕とは、一言で謂えば職業を倫理的に営むこと、倫理的な商売を営むことであり、それを実践すれば、自ずから職業は栄えていくとロータリーは説くのであります。

では具体的には、一体どのようにすれば職業を倫理的に営むことになるのか。

「職業を倫理的に営む」というのは、言い方を換えれば、ロータリアンが全ての生活関係において、自分の行動に愛を込める、ということであります。この点について、一つの物語を紹介しておきます。

実は、今日から丁度25日前の2月26日は、あの有名な2・26事件の起きた日であります。昭和11年2月26日、陸軍の青年将校達が反乱を起こした日であります。この時、反乱軍に殺された人に、教育総監渡辺錠太郎大将がおられました。渡辺大将には、当時、小学生のお嬢さんがおられました。今、ノートルダム清心学園の理事長をしておられます渡辺和子先生であります。

実は、この話は、私がこの30年来関わっています第2680地区のRYLAセミナーに二回ほど渡辺和子先生をお招きした時にお聴きした話であります。

ところで、反乱軍が渡辺邸に侵入してきたとき、渡辺大将は、お嬢さんの渡辺和子先生と書斎におられたのですが、反乱軍が書斎に入ってきたとき、渡辺大将は、咄嗟にお嬢さんを机の下に隠しました。そこへ、反乱軍が入って来て、渡辺大将に43発の軽機関銃の銃弾を浴びせ、銃剣で滅多突きにして殺してしまったのであります。

和子先生は、1メートルと離れていない目の前で、お父様を殺されてしまったのであります。このことが動機となって、カソリックの信仰に入られたのかと思っていましたら、和子先生のお話を聞くとそうではないと言っておられました。

実は、カソリックでは、30歳になると、修道女にはなれないそうですが、先生は、29歳まで外資系の会社で、部下をもつエリートな立場におられたのであります。

しかし、感ずるところがあつて、29歳にしてカソリックの信仰の道に入られました。そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られたときの話であります。

暑い夏の或る日、食堂で約130人位の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられました。その時、先輩のシスターが先生に、『シスター、貴女は、今、何を考えていますか』とお尋ねになりました。先生は、『何も考えていません』とお答えになりました。

すると、その先輩のシスターは、厳しい顔になって『貴女は、時間を無駄にしています』といいました。先生は自分の耳を疑ったそうであります。『何故?』

その先輩は、『おなじくお皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、何故、心の中で「お幸せに！」と祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とナイフとフォークを並べるということは、時間を無駄にしています』と諭されたそうであります。

渡辺先生は、『私は、今まで如何に効率的に仕事をするか、ということをお教えられてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは、初めて教わりました。時間に愛を込めること、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。しかし、目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わるということ、それは一つには、私がお幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという信仰であります。

ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、お皿並べというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事は実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にした時に雑用になるということをお教えられました。だから、救われたのは私です。

つまらないと思ってお皿を置く、お幸せにと祈ってお皿を置く。外から見た限りは全く同じに見えます。かかった時間も変わらない。しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質が変わっている、ということは、その人自身が変わったということです』と述懐しておられました。

お皿を並べるというつまらない行為に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。私達の全ての行動に愛を込めると言うことは、言い換えれば、ロータリーのいう倫理的な生活をしなさい、と謂うことでもあります。これは人を育てる基本前提であります。

このように、ロータリアンは、企業経営においても心の問題を重視しなければなりません。したがって、渡辺先生の言葉は、ロータリアンの企業経営の基本的な在り方を示していると思うのであります。仕事に愛を込める、時間に愛を込める、そのことなくして倫理的な人間を育てることは出来ないと思うのであります。

渡辺先生は、お皿を並べるという単純な行為に、「幸せを祈るという目に見えない大切なものが籠められるか籠められないかによって、世の中は大きく変わる」、と言われました。このことは、私達ロータリアンが肝に銘ずべき言葉だと思ふのであります。

このことについて、私の考えを少し補足しておきます。

これは、私達一人一人の心の問題であります。一人一人の心の中にあるもの

によって世の中が大きく変わっていくのであります。

例えば、1989年にソビエト連邦が崩壊しました。あの原因は一体何かと言いますと、それは、ソビエトの国民一人ひとりの心の中にあった小さな小さな不満であります。まさに、心の中にあった小さな小さな不満が積もり積もって、モスクワにおける民衆の暴動に際して一気に爆発し、遂にソビエト連邦という巨大な主権国家を崩壊させてしまったのであります。

このように、国民一人ひとりの心の中にあるものが世の中を大きく変えていくのであります。渡辺先生が、お皿を並べるといふつまらない行為に、「幸せを祈るといふ目に見えない大切なものが籠められるか、籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われたことと全く同じことなのであります。

要するに、私達一人ひとりの心の中に宿るもの、それが大事なのであります。実は、イギリスでは、「ロータリーは人間の魂の在り方の問題である」とも言われているように、ロータリーの職業奉仕は、心の問題を重視する、優れて精神的な奉仕であります。まさに、ロータリー運動が倫理運動と謂われる所以であります。

このことのロータリー的な意味を更に補足しておきます。

ロータリーでは、毎年、国際ロータリーの会長が、自分の個人的な所信の表明として、ターゲット（今ではこれにR I 理事会の決議の裏打ちをつけてテーマと謂っています）を出して来ました。私の好きなターゲットは、1960-61年度の国際ロータリー会長エド・マクローリン（J. Edd McLaughlin）の“You are ROTARY”というターゲットであります。即ち、

“You are ROTARY” 貴方がロータリーですよ。ロータリーというのは、国際ロータリーのことではない、ロータリークラブのことでもない。あなた方一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーなのですよ、とマクローリン会長は呼びかけているのであります。

実は、これは優れて英米法的な発想なのであります。アメリカ・イギリスの法律、英米法的なものの考え方によれば、国家というものは、政府でもない、国会でもない、国民一人ひとりの心の中に宿るものだと考えるのであります。即ち、

英米法の考え方では、国家とは国民の総体であると考えます。しかし、国民が一億人集まっても、それだけでは烏合の衆に過ぎません。この人間の集団を国家という統一体にするためには、主権や統治権などのプラスアルファが必要なければなりません。

したがって、ヨーロッパ大陸法の考え方によれば、国家は、領土と国民、それに加えて統治組織という三つの要素によって成り立つと考えるのであります。英米法は、国家は領土と国民だけで成り立つと考えるのであります。

では、この主権や統治権等のプラスアルファは、一体何処にあるのかと謂いますと、英米法は、国家というものは一億の国民の一人ひとりの心の中に宿る、即ち、一人一人の国民に分属する、と考えるのであります。この英米法の考え方がアメリカで生まれたロータリーの根底に流れる思想になっているのであります。日本国憲法の国民主権とか主権在民とかいう思想も、その根底には、この考え方があるのであります。我が国では、明治の先覚者福沢諭吉先生が早くからこの考え方をとっておられました。

このように英米法は、国家とは一人ひとりの国民のことだと謂う立場をとるのであります。したがって、一人ひとりの国民が理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨けば、その徳性の総和は、必ず国の政治に反映し、国家の徳性も上がって行くと考えるのであります。国家の徳性が上がれば、あの忌まわしい戦争も予防できると考えるのであります。

ロータリーもこれと同じであって、一人ひとりのロータリアンが自分の徳性を磨く、心を磨くことによって、業界や地域社会、そして国際社会の徳性が磨かれ、世界中が明るくなるとR Iのマクローリン会長は呼びかけているのであります。

このように、徳性を磨く、心を磨く、ということは、先程の渡辺和子先生の話にもありましたように、私達一人一人がお互いに幸せを祈り合うことなのであります。そして、私達ロータリアンが、そして、世界中の人達がお互いに徳性を磨き合い、幸せを祈り合う世界、そのような世界を実現することがロータリーの理想、奉仕の理想なのであります。だからこそロータリーは、倫理を提唱するのであります。正に、ロータリーが倫理運動であるといわれる所以であります。

さて次に、アップ・トゥ・デイトな問題として、ロータリーの倫理運動が現在どのように機能しているのかが問題であります。

最近の職業社会の現状を見ますと、ロータリーが倫理運動であることが殆ど機能していないかのように見受けられるのであります。即ち、

最近、企業倫理、職業倫理に反する事件や企業の不祥事が頻発しています。その結果、例え優良な企業であっても、マスコミの厳しい批判に曝されて、一瞬にして企業の信用を失墜して消滅する事例があります。

例えば、最早少し古くなりましたが、牛肉の産地・品質を偽装した雪印食品は、偽装表示が発覚してから僅か1ヶ月後に会社の解散を決定しました。

また家畜伝染病予防法違反の浅田農産は、鳥インフルエンザの発生を隠蔽したことが発覚してから僅か3ヶ月後に廃業を決定しました。

その他、姉齒建築設計事務所の構造計算偽造事件、そしてミート・ホープの

牛肉偽装事件、最近では船場吉兆の事件、三笠フーズ事件、浅井の食品衛生法違反事件、そして今また中国産鰻蒲焼きの産地偽装事件など職業倫理に違反した事件は、誠に枚挙に暇がないのであります。

殊に、ミート・ホープの経営者は、こともあろうにロータリアンであり、しかも、元クラブ会長であり、事件当時は情報委員長であったと謂います。ロータリーは、一体どうなってしまったのでしょうか。こんなことは古き良き時代のロータリーでは、絶対に考えられないことであります。

これらの職業倫理頹廢の現象は、特に1990年代のバブル崩壊後、従来の高度経済成長の矛盾から生じた現象であり、経営者や従業員の職業倫理の衰退が原因であると謂われているのであります。私は、問題はそのような現象的な表面的なものではないと思います。この問題は、より根源的には、戦後日本の教育が技術教育一辺倒になったことに原因があると思うのであります。即ち、昔、Paul Tillich という神学者は、教育には三つの分野があると謂いました。

1. Technical Education 技術教育

2. Humanistic Education 人間がお互いに心豊かになろうという教育

3. Inductive Education 人間とは何かという真実に招き入れる教育

曾て、ソ連が人工衛星スプートニクを打ち上げたとき、アメリカは慌てました。そこで、大学に行くと100万\$儲かるよ、などと言って、技術教育を奨励したのであります。そして、日本も同じように、技術教育一辺倒になって、世界第2の経済大国を築き上げたのであります。そこまではよかったです。

しかし、その結果どうなったか。人間がお互いに心豊かになろうという教育、即ち Humanistic Education、そして、人間とは何かという真実に招き入れる教育、即ち Inductive Education という教育の分野が欠落してしまったのであります。

このように、戦後の日本は、技術教育ばかりに専念したために、人間として大切なものは何かということではなく、人間にはどれだけの能力があるか、ということ計る試験第一主義の教育、効率一辺倒の教育が横行してしまったのであります。

今、世界的な視野に立ってみますと、世界の状況は、人間個人に中心をおいて、一人々々の人間の問題を考えなければならない状況になっていると思われるのであります。技術教育というものから、もっと人間を大事にする教育、所謂 Humanistic な教育 Inductive な教育が求められていると思うのであります。

しかし、日本の現実には、未だ技術教育一辺倒のように思われるのであります。これが、現在の職業倫理衰退の最大の原因であると思うのであります。

今の日本の現状を一言で言えば、まさに人間が徒らに金を求めた結果であり

ます。

戦後、廃墟と化した日本は、国民が貧しさに堪えて必死に働きました。その結果、飛躍的な高度経済成長を遂げて豊かにはなりましたが、そのために物質的繁栄に酔いしれて、徒らに金を求めて倫理を忘れてしまったのであります。

なお、倫理の衰退は日本だけの現象ではありません。ロータリーの世界を見ても倫理の衰退は疑うべくもありません。

今、ロータリー100年の歴史を顧みても、第二次世界大戦の終わる1945年までのロータリーには、1915年の「全世界の職業人を対象とするロータリー倫理訓」が採択されて以来、職業倫理が確立されていました。

しかし、最近ではアメリカでも優良企業と言われた通信大手ワールドコムやエネルギー大手エンロンの粉飾会計等がありましたように、倫理の衰退は日本だけの現象ではないようであります。

何年か前に国際ロータリーの元会長が戦後は職業奉仕委員会を開いた記録がないと言っていたことなどロータリーの世界における職業倫理の衰退を如実に物語っていると思うのであります。

アメリカを例にとれば、戦後、アメリカによるドルの支配、そして、アメリカによる世界平和を意味するパックスアメリカーナ、それによる物質的繁栄。しかしその結果としての精神的衰退。したがって、今はどうでしょうか。

先般来、アメリカから発した金融危機に始まり、世界恐慌の虞が出てきました。これも人間が徒らに金を求めた結果であります。どのようになっていくのか全く出口の見えない現在、人間の欲望の暴走をどのようにして食い止めるのか、難しい問題であります。しかし、これは最早、倫理運動たるロータリーの干渉出来る問題ではありません。

これを要するに、資本主義の爛熟による職業倫理の衰退は、ロータリーの世界においても否定することは出来ないのが現状であります。

このように、古来、人間が徒らに金を求めて身を滅ぼした例は枚挙に暇がありません。しかし、人間が心を求めて、即ち、倫理を求めて身を滅ぼしたことは、未だその例を聞かないのであります。これは大事なところであります。

以上「職業奉仕における個人と職業の倫理」というテーマで私なりの考え方を申し述べました。御静聴有り難うございました。

以上